清風百年新聞

第１０号
１００周年生徒
実行委員会発行
担当：２年Ｅ組

昭和３４年(１９５９年)

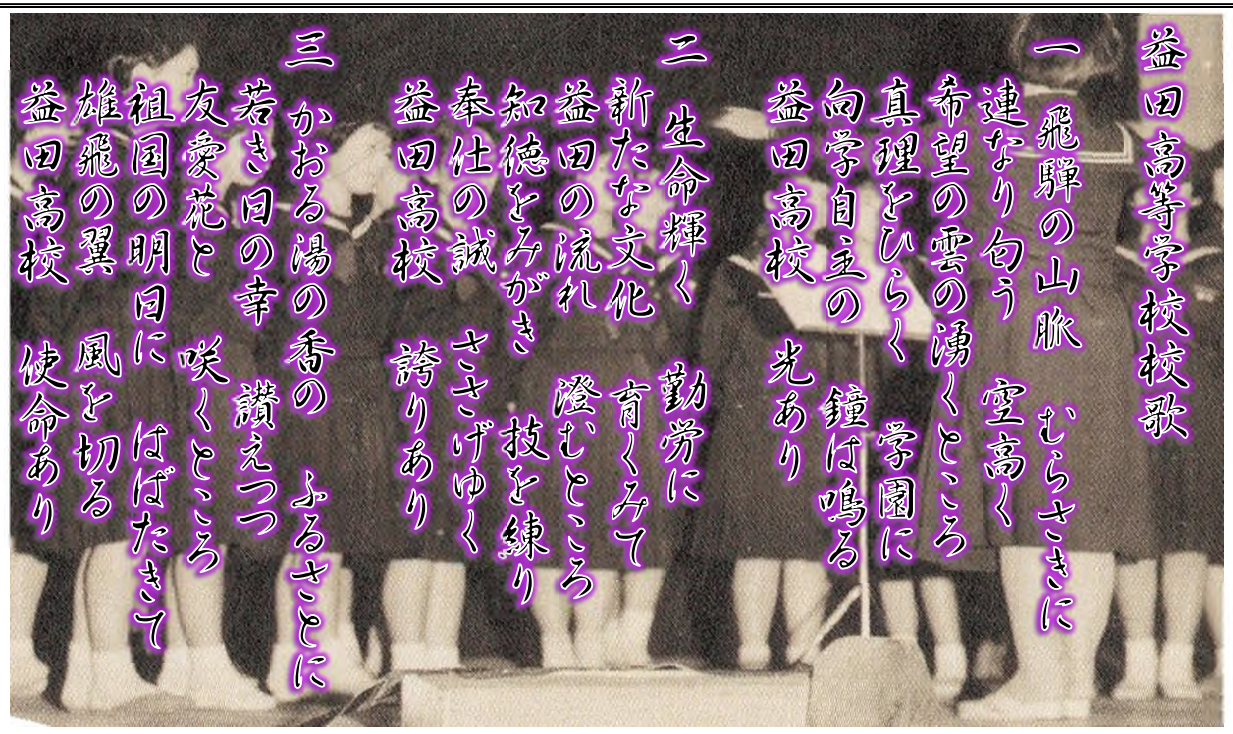
益田高校校歌制定

長年の懸案であった校歌の歌詞は、広く公募した結果、１００編を超える応募の中から厳選して決定しました。

校歌の制定

校歌が制定されたのは益田高校発足から１０年後の昭和３４年です。作詞は脇太一さんで、「ラジオ体操の歌」を作詞したことで有名です。他にも多くの学校の校歌を手がけた方です。校歌の歌詞は公募とし、１００編を超える応募のなかから厳選されました。作曲は、平井康三郎さんで、「ゆりかご」「とんぼのめがね」「スキー」などの童謡を手がけ、日本の歌曲・合唱曲の創作活動を率いた作曲家です。

新しい校歌は、この年の芸能祭で合唱部の歌唱で発表されました。



校歌代わりに歌われた「生徒讃歌」と「別離の歌」

校歌が制定されるまでは、「益高生徒讃歌」や「益高別離の歌」が、校歌の代わりに式典などで歌われていました。

益高にも校歌を作ろうという話が持ち上がり、職員会の話題となった。私は校歌というものはその学校の長い伝統の上に出来上がった学校精進が歌い上げられるべきで、急いではいけない。それよりも、むしろ当面必要なことは、生徒自らが、どのような生活を求めていくべきかであり、新しい益高精神がどのようなものであるべきか。そのような益高生の理想像を、生徒の生活に即して歌い上げられなければならぬと考えた。まずは校歌よりも前に「生徒讃歌」を作れと主張し、それが校内に公募され、結局我々の大先輩であり、当時益高のディーンであった笠原吉郎先生の作詩「益高生徒讃歌」となったように記憶している。（中略）

毎年卒業の時期になると、言い知れぬ哀感が教師、卒業生の胸中に去来する。毎日を汽車で一緒に通っていた田中晃先生と相談して、益高エレジーを作った。田中先生に作曲してもらい、私が作詩した。汽車の窓から朝夕益田川ぞいの山や村々を眺めつつ、そこから黙々と通学する生徒たちの姿を眺め、卒業期の生徒の心情を思いつつ、わかれゆく者の哀感を作詩した。それはまた、私自身の益高への愛着だったかもしれない。「益高離別の歌」ができ、予餞会で発表した。

北原哲雄　益高五十年より

私は少しばかり楽器が演奏できたことから音楽クラブに入部しました。クラブ顧問の田中晃先生から、「来年2月に卒業生を送る会が企画されており、別れにふさわしい曲を作ろう」と提案があり、「すでに作詞は北原先生に依頼して完成しているので、野村君のスチールギターを生かして曲を作ろう」との発言があったのです。詞のタイトルは「益高別離の歌」でありました。

スチールギターで一小節メロディーを奏でると先生が譜面を起こすといった手順で別れの歌にふさわしい旋律で曲が完成し、当時の萩原劇場で開催された「卒業生を送る会」で全校生に発表披露したのであります。

野村博通　８０周年記念誌より

益高生徒讃歌

一 光よ輝け白雪の彩
我が名は益高　萩の杜
集えりわれら眉根は若し
南飛の文化　今花咲かむ
見よ春蘭の香る校庭

二 狭霧よかおれ轟く川瀬
我が名は益高　萩の杜
集えり我ら眉根は若し
南飛の文化　今花咲かむ
見よ碧澤におどる若鮎

三 血潮よ高鳴れ空しらむ
我が名は益高　萩の杜
集えり我ら眉根は若し
南飛の文化　今花咲かむ
仰げ新し世紀の太陽

益高別離の歌

一 あこがれの緑が丘に
みつとせの
星は移りて若人の
別離の歌は胸に秘む
ああ学び舎よさらば今

二 追憶は益田の川辺
ふるさとの
光に香る軟風に
友と語りし夢を呼ぶ
ああ学び舎よさらば今

三 人の世に我は
山の子　幾たびか
転びつ立ちて一条に
真理の道を生きむ哉
ああ学び舎よさらば今